

十二年の春より氣分相滞り、後には浮腫病に成り、良醫療養の術を盡すといへども、功驗を奏せず。彼の後室日頃妙立寺の祖師を信仰せし處、或夜の夢に僧枕元に来て告げて曰く、汝が病甚だ重し。此の歌の下の句をば心ある者に付けさせ、額にして我が前に掛くべし。然らば病速に治すべし。我こそ日頃念する處の祖師なれとて、夢は醒めたりけり。後室彌増、有がたく覺えて、夜の明くるをまち、甥の山本總介を招きよせ、夢想の趣を具に語り聞かせ、彼の告げ給へる夢想の上の句をば申聞け、是非とも此の下の句をば總介に讀みつきくれよと申しけり。總介かたく辭すといへども、伯母の命令黙止がたく、殊に病氣祈請の事なれば止むを得ず、下の句を考へ付けたりけり。

夢想上の句

はらからに溜まりし水の流れしは

續繼下の句

音こゝろよき瀧のしら糸

右總介手跡にて上下一首を調筆し、扁額となし、妙立寺の祖師堂へ奉納して掛け、るに、腫氣日々消解し、遂に本復

すと。此の祖師の靈驗、かゝる事往々多しといへり。

○安養山弘願院

淨土宗也。由來書に云ふ。當寺開基正保二年願譽和尚建立。寺屋敷は元祿五年に請込地共二百六十歩餘地子地也。とありて、従前は妙立寺と向合せなりしかど、文久二年妙立寺焼失して再建の時、今の如の堂宇を建てたるにより、夫れより弘願院は妙立寺の横小路と成りたり。三箇屋版の六用集に、弘願院大教寺と載せたり。此の寺號今は呼ぶ事なし。又當寺の什物なる涅槃像は、織地の涅槃像とて、金澤市中にては當寺のみなりし故、其の名高し。

○惠光山西方寺

天台宗眞盛派也。寺記に云ふ。當寺開祖盛尊和尚は、越前國府中西方寺の住職なり。藩祖大納言利家卿府中に在城の頃、盛尊の法徳に深く信服し給ひし故、天正十三年二月金澤へ召寄せられ、寺地若干歩賜はり、一寺造立を命ぜらる。然處其後右寺地召上られ、泉野今の寺地を賜はり、爰に造立す。とあり。天正十三年に賜はる寺地は、何れの地ならん。泉野へ移轉は元和元年なるべし。當寺は江州坂本西教寺の

末也。按ずるに、舊藩祖大納言利家卿、いまだ越前の府中に在城ましませし時より、當時開山盛尊をば甚だ尊敬し給ひし故、加賀國封内と成り、金澤入城の後盛尊を召寄せられ、寺地を賜はりて造立を命ぜられたり。其の寺地は今云ふ大手町なりと聞ゆ。三壺記に、慶長七年金澤城内天守に雷落ち、焰硝藏へ火入りたる時、前田美作屋敷の外なる西方寺の屋根へ、長刀持ちながら火薬の勢ひにてはね付けられ、死する者ありといふ事見えたり。右西方寺は即ち盛尊和尚が創立せし西方寺なる事知られけり。さて其の後尾坂下より轉地を命ぜられ、犀川口惣構の際へ移されたりけん。三壺記に、玉泉院殿は元和九年二月廿四日に逝去し給ひ、第三年忌の前年の十月、藤澤の遊行上人加州へ廻り來る。是よりさき三十代目の遊行上人廻來の時、常善寺いまだ小庵にて指支へ、犀川惣構の際に在之西方寺にて動行せられたり。とあり。右西方寺も即ち當寺なるべし。犀川惣構の際とあるは、若しくは今柿木島御厩橋の地邊ならんか。此の地昔は寺院多かりしを、元和元年に泉野寺町へ移されたるよし、寺々の由來書に載せたり。

○菊姫君御影堂

菊姫君は、利家卿第六女にて、豊臣秀吉公の養女なり。前田家略譜に、菊姫天正六年某月日生。生母名岩、越前人笠間與七女也。菊姫初豐太閤養育之。天正十二年八月廿一日於近江國大津西川孫左衛門宅早世。于時八歳。法號金溪空玉童女。葬于同國坂本西教寺とあり。按ずるに、此の姫君の事は、舊藩五世參議中將綱紀卿、寛文十二年に穿鑿せしめ給ふ時、生母隆興院の娘笠間半七郎母自筆文に、左の如くあり。

御子様御五人様御さ候とうけ給申候。わか子様はほどなく御せいきやうあそばし候とうけ給申候。御ひめ様御二人様のうち、御あね君様御きく様と申は、大かう様の御やうしにあそばし、御七つにて御せいきやうあそばし候。今御一人様は御ほち様に御さ候。下略。

半七郎 母

きしの様

おかわ様 参

かさねて御きく様御せいきやう月日御たづね下され候へ